

# 地域課題解決学習の取組 高知県立大方高校の場合

高知県黒潮町教育長 畦地 和也



今教育界ではアクティブラーニングという言葉が盛んに使われている。文科省も次期学習指導要領に向けて、「主体的、対話的で深い学び」の重要性を叫んでいるが、10年ほど前から全国で起きているのは、それらを内包した実践的な学習である「地域課題解決学習」だ。特に高等学校でのその取組が急増している。

当町にある大方高校は、開学のときからこの学びのスタイルを取り入れており、全国では早いほうだが、今回は取組の課題と必要性について述べてみた。



課題解決学習の成果である「カツオたたきバーガー」のふるまい（宮城県気仙沼市）

てしまっていた。また、県立高校ゆえか、地元自治体や地教委との連携はほとんどなく、地域にあつて地域にない（に等しい）学校であった。



第1回世界津波の日高校生サミット in 黒潮の議長（大方高校生）が総理を訪問

## 高校の改編が転機

高知県立大方高校は、平成17年にそれまでの商業高校から、多部制単位制高校に改編された。当時の商業高校は、かつて地元中学生の進学先上位にあった学校から凋落激しく、もったい学校になっ



第1回世界津波の日高校生サミット in 黒潮で議長を務めた大方高校生

## 町の課題にチャレンジ

黒潮町では人口減少等による衰退などで様々な課題が生じている。このため、高校が持つ力を課題解決に注ぐことには意義があり、また、地域の側も地域を継ぐ人材の育成に協力する機運が高まった。

それが、単位制高校へ改編と同時に、高知大学と連携した「自律創造型地域課題解決学習プログラム」と、高等学校では全国で最も早い「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」を導入し、地域と様々な交流が促進されることで、学校は激変していったのである。



課題解決学習関係先での打合せ風景



# 地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」

～“魅力を発信”地域の中心に高校がある～

そこで平成16年1月に「学校の未来を語る会」（現・学校運営協議会）が発足し、同会の提言をもとに地域に開かれた学校へのシフト、地域と連携した人材育成、「知」のネットワークの中心的役割を果たすことなど、地域参画型の学校づくりがスタートした。

この取組の一つに地域の活性化や課題解決を目指す「自律創造型地域課題解決学習プログラム」がある。同プログラムは、町（官民）からの課題（ミッシェン）を受けて、生徒達が取り組んでみたい課題を班ごとに選りチャレンジするものである。

生徒は各自の名刺を用意して、課題解決に必要な相手先に連絡・調整のうえ訪問し、課題を聞き出す。そこから職員で解決策を検討し、住民、企業等と協力しながら解決を図っていく。

このプログラムの中から、黒潮町の「黒塩」や地元のカツオのたたきをハンバーガーに挟み込んだ「カツオたたきバーガー」が生まれた。今では道の駅等で販売されるなど、ご当地グルメに成長している。



カツオのたたきバーガー  
© 道の駅ビオスおおがた

また、イメージキャラクター「かつばあ」を生徒が生み出し、黒潮町の「産業

祭」などで活躍している。

ミッシェンを通じて地域と学校がつながること、柔軟なアイデアが地域活性化のヒントになり、住民も生徒の活動により元気づけられる。また、生徒も社会を良くする夢を持ち、実現に向けて自身の在り方を考えるきっかけになるなど、地域と学校の双方に効果が生じている。

一方でこのプログラムをさらに進化させるためには、教員のファシリテイト力などのスキル向上、弾力的な授業時間への配慮、生徒自身が「何をするか」ではなく「何のためにするのか」、「その行為を通じて人々を、地域をどう幸せにするのか」という本質を見極める力を身につけるなど、課題も残されている。

## 子どもたちの未来のために

課題は様々あるが、それでも地域から課題を提示し、それに生徒たちがチャレンジする地域課題解決学習は、これから必要な学びのスタイルであると思っている。

地域の課題は姿かたちを変えて永遠にやってくる。しかも、世界の情報が一瞬で同時につながる時代になって、やってくる地域の課題と課題のスパンはどんどん短くなり、ボリュウムも更に増して行く。その意味では子どもたちの未来は、非常に厳しい時代を迎えるとも言えるし、これまでにない様々なチャンスが訪れる時代とも言える。

このような

時代にあつて、未来の人材である子どもたちには、ふるさとから出て行つてどこに住みどのような仕事に就こうとも、ふるさとを忘れず、ふるさとに愛着と誇りを持ち、ふるさとへの貢献意識を持つて、生きていってもらいたいと思う。

人生には何度も試練がやってくる。時には生きていくのがつらいことも、一度や二度ではないはずである。そのような時、生きる希望を失わず、心の支えになるのは、ふるさとの家族や友達、ふるさとの風景やお世話になった一人ひとりであるはずだ。

また、生徒たちが考えた解決策が、すぐに地域の課題解決にならなくても、彼らは将来必ず地域に貢献してくれるはずである。

なぜなら、高校生のときに十分な解決策を見つけれなかったとしても、そのことはふるさとの困りごととして、彼らの心に刻まれているはずであり、いつかその記録がリードされ、具現化されると、彼らの力を信じているからなのだ。



課題解決学習成果発表会の生徒発表風景